



人間性の涵養（拾遺）

倉 橋 惣 三

筆者は以上、道徳性というものを致して語らずして、専ら人間性を説いて来た。しかも、道徳性を否定するものではなくすべての道徳性は、人間性の生むところであることを思うのである。寧ろ強めて言えば、人間性を離れて、人間の道徳は無いことを思い。人間性の豊かなる、多岐の実果が、種々のその場合々々の道徳として、形成せられると思ふのである。

こゝに、種々の道徳の名を挙ぐるのは煩にして容易でないが、そのいずれを執るとも、人間性の広き範囲内をもとしないことはない。たとえば、人と人との間の親切、友情、夫婦の間の道、更に所謂君臣の間の道、等にしても、人間性の間柄でないものはない。たゞその関係の在り方、その介在要素、外的慣習、すなわち、社会的評価の動き方などが、複雑になるだけである。純粹に洗って検出すれば、人間性の有無濃淡、強弱に帰するのである。

すなわち、孝も親子が互にもつ人間性の発露であり、忠も

亦、それだからうるわしいのであるまいか。少くも、そのうるわしさがなければ、形式規範の關係に過ぎまい。難きをもとにする考え方としては、規範の道徳的普遍性、形式の厳正に、道徳をもとめるも亦、時に或は己むを得まい。というよりは、それが道徳の通性の如く思われたりする。最も人間性の表現とせられる夫婦の間の道徳さえ、人間的に味気ないものであつたりする。道徳的に善なる間だけが、良き夫、良き妻とせられる。恋愛は人間的であり、夫婦は、人間的でなかつたりする。

民主主義という言葉は、政治上、法律上のこととして通用せられるが、デモクラチックの社会も、友人道も、夫婦道も人間性の問題であるまいか。故に、民主的なる行動も關係も人間性の基礎あるにおいて始めて可能なのである。——人間の基礎のない民主主義は単なる關係形式であり、眞の民主主義の名に値しない。民主主義とは、ひ。きようするに人間

主義のことである。その人間主義も、所謂ヒュマニズムの道徳の名ではない。人間が人間として、あたりまえの人間性の流動する人間の名である。いうべくんば、人間主義とでもいうか。人間性の所有者以外のことでないという、極くあたりまえの意味において。人間でないということは、道徳人でないということではなく、道徳はあつても、人間性の乏しいをいうことである。人間性などというのも、むずかしい。平に言えば人情といういふ言葉が昔からある。人情あつての、人情のいろ／＼のあらわれが道徳である。

人情を涵養するの、幼児教育のはじめにして、おわりである。茶の香りのある茶をつくらう。黄茶白茶、沅んや、混り色、乱れ咲、をその後その上のことである。或は、人情を豊に涵養しておけば、後はあやまり少からんが為である。それも、涵養である。強いて養おうとしては、却つて、あやまり繁からんことを怖れる。

道徳性は、発達せる人間生活である。或は人間生活の完成として要求せられる。幼児教育は人間生活の基本段階である。そこで道徳性の要求せられることは、困難であり、無理であり、不自然でもあろう。基本生活の自然を涵養しておけば、道徳への発達を希えるであらう。

発達の不自然に早熟がある。道徳教育の早熟は屢々怪異であり、無意識的虚偽であり、屢々有意的虚偽のもとともな

る。道徳生活として最も忌むべく、最も恐るべきことである。そして、その眞の発達を不可能ならしめるであらう。知的早熟においては、その知の進行を妨げるだけである。道徳的早熟にあつては単に妨げるのみでなく、或いは彎曲せしめ或いは萎縮せしめる。道徳性としての本質を破るものである。幼児教育の誤謬として、過誤としてこれ程恐るべきはない。おとなになつてからの虚偽の道徳は、虚偽の理由に恕すべきところもある。幼時から、道徳的不真に慣らされることは終に、道徳的麻痺者をつくる。到底救い難きにも陥るであらう。所謂教育の弊斯くの如く甚しきはない。

おとなのいつわりの人間性は、人間性のいつわりを教える。その罪、知的誤謬の教育の比ではない。しかも道徳性のもとなる人間性にいつわりを与えられて、成長の後も、そのいつわりの道徳者＝偽善者、となるもの、世に少くない。幼児教育の任に当るもの、深く警戒すべきであらう。

人間性涵養のはたらきは、道徳性の訓練の如く蕭烈、強度ではない。しかし、その「眞」の強さにおいて、一点の緩慢をゆるさない。人間性は純にして、我れながら己むに己まれぬことであるからである。道徳性を、その己むに己まれぬ一徹の強さに求むる教育は、眞の道徳教育の中核であるまいか。